

青年期における「自己の死」イメージについて — SD 法を手がかりとして —

渡邊 玲子

I 問題

現代社会は、生に撃がる健康や若さの価値を高く評価し、死に繋がる病や老いを極端に恐れて拒絶しようとしている。しかし、隠蔽された死は、脳死、臓器移植、尊厳死、癌告知、人工中絶、末期医療、自殺といった様々な形でその見直しをせまっているように思われる。これら個々の問題の根底では、「私たち人間にとって死とは何なのか」という生きている私たちにとっての死、側で見ることはあっても経験したことのない死、心の中にある死が問題になっていると思われる。このように、心の中の死に焦点を当ててみると、いじめや子供の自殺、少年少女による残酷な殺人なども、心の中の死と隠蔽された現実の死との対比という観点から考えることができる。

一方、これまでの研究では、そのほとんどが現実の死のみを問題としており、それが誰の死であるかということに注意が払われていない。これらに対する疑問のうえに、本研究では一人称の死、二人称の死、三人称の死を区別して心の中の死、つまり死のイメージに焦点を当てる。このように誰の死であるかを区別することで、死を意識の深さから見るという試みが可能である。三人称の死のイメージは、知的に語られる表面上の死、一人称の死は、心的体験としての象徴的な意味での死、二人称の死はその中間に位置し、現実的な対象喪失が主題でありながら象徴的な親殺しも関係してくる死を映し出すと考えられる。

心の中の死について Jung, C. G. は、死を体験して再生が訪れるという心理的変容の過程、イニシエーションとしての死を論じた。青年期の成長のためにはこのイニシエーション、つまり、一度死ぬ体験が必要になってくる。その死の体験を考える上で有益であると思われるものは、Hillman, J. (1979) の述べる underground の死と underworld の死の区別である。underground は、生の目的性と対立した、意識の影であり、underworld は、魂の世界、夢やあいまいさの世界、ものごとを変容するところ、豊穣な場所でもある。この underworld は、境界性の領域、非二元論の世界、二律背反が同時に成立する特性を持つ世界でもあると考えられる。そして、この underworld の死に、男性よりも女性の方が近いことを Spignesi や、 Demetrakopoulos, S.

(1987) は、述べている。

II 目的

1. 中学生、高校生、大学生を対象として、SD 法により「自己の死」、「身体自己の死」、「親の死」、「一般人の死」の 4 つの概念についてそのイメージを測定し、差異を明らかにする。
2. 1. の 4 つのイメージについて男女差を検討する。
3. 青年期において、1. の 4 つのイメージがどのように変化するかを発達的に検討する。
4. 人格特性の中の Self-Esteem、不安と 1. の 4 つのイメージとの間にどのような関係があるかについて検討する。
5. 以上の 1 から 4 を手がかりとして、心の中の死イメージの様相と、その意味づけを探る。

III 方法

1. 調査対象

- 1) 大学生 154 名、19~24 歳：男子 88 名、女子 66 名、
- 2) 高校生 150 名、16~17 歳：男子 62 名、女子 88 名、
- 3) 中学生 114 名、13~14 歳：男子 47 名、女子 67 名

2. 質問紙

- 1) 死イメージ尺度：
「自己の死」イメージ、「身体自己の死」イメージ、「親の死」イメージ、「一般人の死」イメージを測定するための形容詞対を作成した。李 (1990) の単独形容詞 SD 法にならい、作成した形容詞対をばらばらにして单極性の尺度とし、六段階で評定させた。

- 2) Self-Esteem 尺度（大学生のみに実施）：
Rosenberg, M. (1965) による Self-Esteem 尺度 10 項目を五段階で評定させた。

- 3) 不安尺度（大学生のみに実施）：
顧在性不安検査 (M A S) 日本版の 50 項目を三段階で評定させた。

3. 手続き

調査は、高校生、大学生の大半 (130 人) については授業時間を利用して集団で実施した。時間は制限されなかった。中学生、大学生の一部 (24 人) については、持ち帰りで記入してもらい、回収した。

青年期における「自己の死」イメージについて

IV 結果と考察

1 因子分析

死イメージ尺度について（大学生）×（4概念）のデータを用い、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った結果、2因子が抽出された。第1因子はnegative因子、第2因子はpositive因子といえる。これは、李（1990）とも一致する結果であった。本研究では、同一の因子に正負の符号が逆で、因子付加量が大きい形容詞の50%以上の付加量を、対をなす形容詞が持っていた形容詞対は全くなく、青年期において死イメージは単極性の意味空間からなっていると考えられた。これは、心の中の死体験とは二律背反が同時に成立するパトスの世界の体験ではないか、という筆者の見解と合致するものであった。また、第1（negative）因子は、undergroundとしての死、第2（positive）因子は、underworldとしての死のイメージと考えることができる。

2 発達的検討

概念ごとに、各因子を代表する項目の評定値を平均し、それを因子得点とした。因子別の男女別因子得点を平均したものを、被験者間要因として群（3）×性（2）、被験者内要因として概念（4）の、3要因分散分析を行った。男子のnegative因子については、群による評価の違いは見られなかったが、特に中学から高校への成長途上で、死に対する否定的イメージが強くなることが示唆された。つまり、生の世界から拒絶された死のイメージが成長とともに高くなると考えられる。これは、男性的なアイデンティティを確立するためには親と一体化した自己像を切り離さなければならないことと関連づけることができると考えられる。positive因子については、誰の死かによってより分化していく傾向が見られる他は、一貫した発達的变化は見られなかった。

女子のnegative因子については、群による概念の評価のしかたの違いは見られず、男子が、高校生、大学生

になると、自己の死、身体自己の死、親の死を同程度に否定的に評価していたことと比較して、女子は、一貫して親の死を他の死よりも否定的に評価していた。また、心の中の死体験といえる自己の死では、男子ほど否定的イメージが高まらなかった。これは、男子の、切断による自我の確立に関係づけられる否定的イメージの増加とは違い、親と分離した新しい自己像への作り直しを迫られることに対する不安の高まりと考えられる。positive因子では、どの概念においても一貫して肯定的イメージが増加していた。女性としての性同一性を獲得する時期と肯定的な死イメージの増加時期とは重なっており、女性性の獲得に伴って、underworldとしての死のイメージを強く持つようになることが推測される。女子にとっての発達は、切り離すことよりもむしろ、包み込むことに関係していると考えられる。

3 死イメージと人格特性

Self-Esteemと不安の二つの人格特性を通じて、関連が深かった概念は、自己の死と親の死、一人称と二人称の死であった。自己の死、心的体験としての死をどのように見ているか、対象の喪失をどのように感じているか、が人格特性と関連してくると思われる。

二つの人格特性を通じて、男子の方が女子よりも死イメージとの関連しているように思われた。特に、男子は男子の心理的発達に関連が深いことが示唆されたnegative因子、undergroundとしての死イメージが増加しすぎると、他と切断されるような不安や、社会的繋がりがうまく保てない自己に不満足な感情が生まれてくるのではないだろうか。一方、女子の自己発達に関連が深いpositive因子に着目して、女子の死イメージと人格特性との関連をみると、ほとんど関係が見られず、女子は肉体化する身体を持つことすでにunderworldに近く、それは人格特性との関連以前の女性としての身体に直接結びつけられる感覚であると考えられる。